18世紀におけるドイツ系移民とペンシルヴァニア植民地

鰐淵　秀一

はじめに
1. ドイツ系移民と植民地社会
2. ドイツ系移民と植民地政治
おわりに

This will in a few Years become a German Colony. ——Benjamin Franklin, 1751[1].

はじめに

近年、イギリス領北アメリカ植民地の歴史を書くにあたり、「大西洋史」という視座が支配的になりつつある[2]。それは従来のようなアメリカ合衆国の成立を前提とした十三植民地の歴史ではなく、17、18 世紀の植民地を同時代のヨーロッパ、アフリカ、カリブ、カナダ、南アメリカなどの地域との相互関係や比較の中で描き出そうとする試みである。換言すれば、アメリカ合衆国の前身としての一国史的観点やイギリス本国との関係のみに注目する帝国史的観点ではなく、より広い大西洋世界という枠組みの中でイギリス領北アメリカ植民地社会の形成を捉え直すことが課題とされるのである。

こうした見方が浸透していく中で、歴史家が描く 18 世紀のイギリス領北アメリカ植民地の姿は大きく変貌を遂げた。特に著しいのは 1980 年代以降の移民史・人口史の分野における進展であろう[3]。そこでは、先住民とイングランド系が人口において支配的であった 17 世紀とは異なり、18 世紀の植民地社会が、ブリテン諸島からのみならずヨーロッパ・アフリカの各地域から多数の人々が自発的あるいは強制的に大西洋を越えて移住することによって形成された、マルチエスニックな社会であったことが改めて認識された[4]。

実際、18 世紀のイギリス領北アメリカ植民地には、アフリカ系、ユダヤ系、フランス系のユグノーやオランダ系など多様な人々が移住したが、とりわけドイツ系移民は 18 世紀におけるヨーロッパ系移民の中で、スコッチ・アイリッシュ系に次ぐ第二の規模を持った移民集団であった[5]。ドイツ系移民が初めてアメリカに移住したと言われる 1683 年

---

[1] Franklin to James Parker, March 20, 1750, *Papers of Benjamin Franklin* (New Haven: Yale University Press, 1959-), 4: 120.

[2] 大西洋史の概念については以下を参照。Bernard Bailyn, *Atlantic History: Concept and Contours* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2005); Alison Games, "Atlantic History: Definitions, Challenges, and Opportunities," *American Historical Review*, 111, no. 3 (2006), 741-757. アメリカ植民地史との関係については、Nicholas Canny, "Writing Atlantic History; or, Reconfiguring the History of Colonial British America," *Journal of American History*, 86, no. 3 (1999), 1093-1114.

[3] 先駆的かつ重要な文献として、 Bernard Bailyn, *The Peopling of British North America: An Introduction* (New York: Knopf, 1986).

[4] ジョン・バトラーによれば、このように本国を超えてヨーロッパのあらゆる地域から移民がやって来たのは、フランスやスペインなどの植民地には見られない、イギリス領北アメリカ植民地に特有の現象であった。Jon Butler, *Becoming America: Revolution Before 1776* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2001), 20.

[5] 18 世紀には現在ドイツと呼ばれている国家は存在せず、神聖ローマ帝国の内外に無数の領邦が

から 1775 年のおよそ一世紀の間に、10 万人を超えるドイツ系移民がイギリス領北アメリカ植民地に渡った[6]。この規模は同じ時期におけるイングランド系移民の数を上回るものであった。そして、そのうち四分の三にあたる約 8 万人の移民たちは、当時の植民地随一の貿易港であったフィラデルフィアを通じてペンシルヴァニア植民地に集中して入植した。彼らはそこでイングランド系、スコッチ・アイリッシュ系らとともに、植民地の人口を三分する勢力となった。

ドイツ系移民の多くは、南西ドイツの出身の農民や職人であり、人口過剰や土地不足、加えて領邦国家による重税や兵役から逃れて、自由な土地を得るために植民地へ移住した。近世ドイツ社会において移動は特別なことではなく、18 世紀を通じて神聖ローマ帝国の域外に移住する者は――その大部分はハンガリーなど東欧へ向かった――90 万人に上り、アメリカ植民地に渡った移民はその中の 10%程度であった[7]。つまり、大西洋史という観点から見るならば、ドイツ系移民のアメリカへの移住は、18 世紀におけるジャーマン・ディアスポラの一支流に過ぎなかったのである。従来、アメリカは「移民国家」であるという神話が専門的な歴史研究にも大きな影響を及ぼしてきたが、アメリカへの移住が世界規模の人口移動の一部に過ぎないということが理解されるだろう[8]。

こうした見方に立ってこれまでの研究を見たとき、18 世紀のアメリカ、とりわけペンシルヴァニア植民地におけるドイツ系移民についての研究の多くは、アメリカにおける移民史研究に特徴的な傾向を持っていることがわかる。そのどれもがドイツ系移民のアメリカ社会への適応の過程、つまり――同化するにせよ抵抗するにせよ――移民たちのアメリカナイゼーションを主眼とする研究である。そして、ドイツ系移民たちが植民地社会の展開にどのような影響を与えたのかという問いは不問のままになっている。本稿が主眼とするのはこの問いである。

それでも、先行研究が明らかにしたことは、本稿の課題となる問いを検討する際の重要な材料となる。フォーグルマンはアメリカへの渡航や植民地でのコミュニティ形成、そして植民地政治への関わりにおいて、ドイツ系移民が自分達の出身地で培った財産や

存在していた。ゆえに現在のような「ドイツ人」というカテゴリーは 18 世紀には想定しえない。よって、本稿で「ドイツ系」と言った場合、german「ドイツ人」ではなく、german-speaking「ドイツ語を話す人々」であると定義する。これは方言も含め、現在のドイツ・スイスの一部地域で使用され、その後ドイツ語と呼ばれるようになった言語を指す。

[6] 研究者の見解により移民数については大きく幅があるが、乗船リストなどを用いて最も詳細に移民数を検討しているウォーケックの 111,211 人を採用する。Marianne Wokeck, *Trade in Strangers: The Beginnings of Mass Migration to North America* (Philadelphia: University of Pennsylvania, 1999), 46.

[7] Hans Fenske, "International Migration: Germany in the Eighteenth Century," *Central European History* 13, no. 3 (1980), 332-347; Wolfgang von Hippel, *Auswanderung aus Südwestdeutschland: Studien zur Württembergischen Auswanderung und Auswanderungspolitik im 18. und 19. Jahrhundert* (Stuttgart: Klett-Cotta, 1984); Georg Fertig, "Transatlantic Migration from the German-Speaking Parts of Central Europe, 1600-1800: Proportions, Structures, and Explanations," in *Europeans on the Move: Studies on European Migration, 1500-1800*, ed. Nicholas Canny (Oxford; New York: Clarendon Press, 1994), 192-235; Idem, *Lokales Leben, Atlantische Welt: Die Entscheidung zur Auswanderung vom Rhein nach Nordamerika im 18. Jahrhundert* (Osnabruck, 2000).

[8] アメリカ史研究における移民史の位置については、Philip Gleason, "Crèvecoeur's Question: Historical Writing on Immigration, Ethnicity, and National Identity," in *Imagined Histories: American Historians Interpret the Past*, eds. Anthony Molho and Gordon S. Wood (Princeton, N. J.: Princeton University Press, 1998), 120-143.

慣習、コネクションなどを利用して、植民地での成功を図ったことを強調している[9]。レーバーは、プファルツ伯領から移住したルター派の移民の言語や慣習、さらに政治意識、所有や権利の観念を彼らの言説から分析することで、ドイツ系移民がアメリカへの移住の過程で自らの文化を保持し、それがアメリカにおいて変容するプロセスを明らかにした[10]。また、エーベルラインはバーデン地方からの移民の渡航前と渡航後の経済的状況を分析することによって、ドイツでの財産の有無がアメリカでの土地財産の規模に影響することを明らかにした[11]。これらの研究が共通して強調するのは、移民が旧世界との連続性や文化的及び経済的関係を維持してアメリカ植民地に適応していったということである。

先行研究を踏まえてドイツ系移民が植民地社会へ与えた影響を検討するために、本稿ではペンシルヴァニア植民地におけるドイツ系移民の入植のパターンおよび植民地政治への関わり方に注目し、彼らの存在および行動が植民地の社会や政治をどのように変化させ、他の人々にどのような反応を引き起こしたのかを検討する。

その際、個別の論点については研究の蓄積があることをあらかじめ指摘しておく必要がある。ドイツ系移民と他の人々との関わりについて、シュワルツはペンシルヴァニア植民地の多民族性に着目して、様々なエスニック・グループの相互作用を通じた民族的・宗教的多元社会の形成を明らかにした[12]。また、植民地におけるドイツ系とイングランド系との関係について、タリーはエスタブリッシュメントであるイングランド系がドイツ系に対して差別意識を抱き、それが政治にも影響したことを[13]、さらにヴェレンラウザーはドイツ系移民について、イングランド系とドイツ系自身が抱いていたイメージの変遷を辿った[14]。ドイツ系移民と植民地政治との関わりについては、ボックルマンとアイルランドが革命期のペンシルヴァニア政治においてエスニシティと宗教による党派性に注目する必要性を指摘し、スコッチ・アイリッシュ系＝長老派とともにドイツ系＝ルター派および改革派教会の重要性を強調した[15]。さらに、タリーは革命期以前の植民地政治においてもエスニシティと宗教というアプローチが重要であることを指摘した[16]。

---

[9] Aaron S. Fogleman, *Hopeful Journeys: German Immigration, Settlement, and Political Culture in Colonial America, 1717-1775* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1996).

[10] A. G. Roeber, *Palatines, Liberty, and Property: German Lutherans in Colonial British America* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1998); Idem, " 'The Origin of Whatever Is Not English among Us': The Dutch-speaking and the German-speaking Peoples of Colonial British America," in *Strangers Within the Realm: Cultural Margins of the First British Empire*, eds. Bernard Bailyn and Philip D. Morgan (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1991), 220-283.

[11] Mark Häberlein, "German Migrants in Colonial Pennsylvania: Resources, Opportunities, and Experience," *William and Mary Quarterly* 50, no. 3 (1993), 555-574.

[12] Sally Schwartz, *A Mixed Multitude: The Struggle for Toleration in Colonial Pennsylvania* (New York: New York University Press, 1987).

[13] Allan Tully, "Englishmen and Germans: National Group Contact in Colonial Pennsylvania, 1700-1755," *Pennsylvania History* 45 (1978), 237-256.

[14] Hermann Wellenreuther, "Image and Counterimage, Tradition and Expectation: The German Immigrants in English Society in Pennsylvania, 1700-1765," in *America and the Germans: An Assessment of a Three-Hundred-Year History: Immigration, Language, Ethnicity*, eds. Frank Trommler and Joseph McVeigh (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1985), 85-105.

[15] Wayne Bockelman and Owen Ireland, "The Internal Revolution in Pennsylvania: An Ethnic-Religious Interpretation," *Pennsylvania History* 41(1974), 125-159.

[16] Allan Tully, "Ethnicity, Religion, and Politics in Early America," *Pennsylvania Magazine History and*

スプリッターは18世紀中葉からのドイツ系による植民地政治の参加を議会レベル、地方行政レベルそれぞれについて計量的な研究を行い、それまで考えられてきたよりもドイツ系は積極的に植民地政治に関わっていたことを明らかにした[17]。

以下、先行研究およびベンジャミン・フランクリンやドイツ系の指導者ミューレンベルグなど、植民地エリートたちの著作や手紙、日記などの一次史料を利用して、18世紀においてドイツ系移民がペンシルヴァニア植民地に与えたインパクトを検討する。これまでの移民史研究の関心が「ドイツ系移民のアメリカナイゼーション」であったのに対し、本稿では、冒頭のフランクリンの表現を借りるならば、「ペンシルヴァニア植民地のジャーマナイゼーション」に注目する。そのため、第一章ではドイツ系移民の大量流入と入植が植民地社会に及ぼした変化や植民地人の反応について、これまでの植民地史研究ではあまり注目されてこなかった言語の問題に焦点を当てて考察する。ついで第二章ではこうした状況下においてドイツ系移民の政治参加が植民地政治にもたらした影響を、1764年の植民地王領化をめぐる選挙を軸に検討する。

1. ドイツ系移民と植民地社会

ドイツ系移民が植民地社会に及ぼした影響を考察するには、まず彼らの入植のパターンを理解しなければならない。なぜなら、ドイツ系移民たちはその過程を通じて植民地において独自のアイデンティティを形成し、ドイツで培った自らの言語や習慣を保持した。その結果として、彼らは18世紀の植民地社会に、民族的多元性や多言語性といった特徴をもたらすことになったからである。こうした展開は植民地におけるエスニック・グループ間の緊張を生み、植民地政治の展開にも少なからず影響を与えることになる。

(1) ドイツ系移民の入植とコミュニティ

はじめに述べたように、植民地時代を通じてドイツ系移民は、イングランド系とスコッチ・アイリッシュ系とペンシルヴァニア植民地の人口を三分した。乗船リストなどに基づくウォーケックの詳細な研究によれば、記録されている限り1683年から1775年までにの間に80,969人のドイツ系移民がフィラデルフィア港に入った。移民は1710年代から次第に増加し、ピークを迎えた1749年には一年間に9,400人を数えた[18]。その多くはペンシルヴァニア南東部に入植した[19]。合衆国において公式のセンサスが初めて行われた1790年において、ペンシルヴァニアにおけるドイツ系住人の9割に当たる128,000人が南東部に居住し、これは地域の人口の4割に相当した[20]。ドイツ系移民が大量に流

Biography 105 (1983), 491-536.

[17] Wolfgang Splitter, "The Germans in Pennsylvania Politics, 1758-1790: A Quantitative Analysis," *Pennsylvania Magazine History and Biography* 122, no. 1/2 (1998) 39-76.

[18] Marianne Wokeck, *Trade in Strangers*, 45-46.ちなみに、この時のフィラデルフィア市の人口は13,000人に過ぎなかった。Gary B. Nash, *The Urban Crucible: Social Change, Political Consciousness, and the Origins of the American Revolution* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1979), 407-409.

[19] 移民が増加するにつれて、人口の増大や土地の高騰によりペンシルヴァニアに土地を得るのが困難になると、より広く安い土地を求めてヴァージニアやメアリランド、ノースカロライナの後背地に南下する移民も多かった。Fogleman, *Hopeful Journeys*, 90-92.

[20] 1790年のセンサスによれば、ペンシルヴァニアの人口は424,000人で、320,000人が南東ペンシ

入した1750年代はスコッチ・アイリッシュの移民がまだ少なかったので、南東ペンシルヴァニアの人口に占めるドイツ系の割合は4割を容易に超えていたと推測できる[21]。

移民の多くは農民や職人であったが、彼らが入植した南東部は当時まだフロンティアであった。そこは後背地で、肥沃な農業に適した土地であった。広大な後背地の存在はドイツ系に限らずイングランド系やスコッチ・アイリッシュ系など多くの移民を惹きつけ、様々な移民集団によって開拓され、コミュニティが形成された。

コミュニティを形成する際、ペンシルヴァニアにやってきた移民たちは融和することなく、エスニック・グループ毎に孤立した集落を作り、住み分けを行った。ドイツ系移民ももちろん例外ではなく、後続の移民たちは古くから入植が進んだ地域やフロンティアである地域のどちらにも入植したが、それらは既にドイツ系が移住していたエリアであった。たいていの場合、彼らは自分の同郷者や類縁者がいるコミュニティに入植したが、そうでなくともドイツ語を話す人々が住むコミュニティに入ることを望んだ[22]。

エスニシティに加えて、コミュニティの形成に役割を果たしたのは宗教であった。ドイツ系移民は同郷者やドイツ語話者の存在という条件の他に、自分の信仰する宗派の教会がある土地に入植した。彼らの多くはルター派か改革派の信徒であったが、彼らは教会のあるコミュニティに入植するか、新しく築いたコミュニティに教会を建てた。また、モラヴィア派やメノー派などのプロテスタント諸宗派は都市も町も無い後背地に入植して、独自のコミュニティを形成した[23]。

こうしてコミュニティを形成したドイツ系移民たちは、カウンティの行政に積極的に関わることでコミュニティの秩序を自分たちの手で維持しようとした。カウンティの行政職は植民地議会議員と匹敵する名誉ある職であり、植民地行政の基盤であった。彼らは自分たちのコミュニティの代表を候補に立て、選挙を通じて郡行政官や保安官などの行政職に選出されることで、カウンティ行政に関わった[24]。1750年代から1770年代には、ドイツ系は植民地の行政職ポスト62名のうち、二割から三割を占めていた[25]。Roeberはこうしたドイツ系移民のコミュニティの行政への関与は、ドイツにおける自治の伝統によるものであると主張している[26]。

こうしてドイツ系移民は出身地や類縁、宗教などのコネクションを通して、植民地に他のエスニック・グループと隔絶したドイツ系コミュニティを形成した。しかし、18世紀のドイツ系移民は内部に多様性を抱えた集団であった。当時のドイツは領邦が乱立し、移民たちは自分たちのアイデンティティを村や地域に求めるほかなかった[27]。そのため、

ルヴァニアに居住していた。そして、ペンシルヴァニアのドイツ系住人は141,000人であった。James T. Lemon, *The Best Poor Man's Country: A Geographical Study of Early Southeastern Pennsylvania* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1972), 14.

[21] Wokeck, *Trade in Strangers*, 172-173.

[22] Lemon, *The Best Poor Man's Country*, 43-49.

[23] Fogleman, *Hopeful Journeys*, 87-92.

[24] ペンシルヴァニアはマサチューセッツ等のようにタウンという行政区分を持たなかったため、行政の最小単位はカウンティであった。Alan Tully, *William Penn's Legacy: Politics and Social Structure in Provincial Pennsylvania, 1726-1755* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1977), 113.

[25] Splitter, "The Germans in Pennsylvania Politics," 51-54.

[26] Roeber, *Palatines, Liberty, and Property*, 27-32, 293.

[27] Rosalind Beiler, "German-Speaking Immigrants in the British Atlantic World, 1680-1730," *Magazine of*

アメリカに移住してきた移民たちはそもそも自分たちが「ドイツ人」であるという意識は抱きようもなかった。

しかし、内部における多様性にも関わらず、ペンシルヴァニアにおいてドイツ系移民は、コミュニティ単位で強い一体性を作り出す要素を持っていた。それは言語であった。彼らはペンシルヴァニア社会の中で、英語を使用せず、ドイツ語を使い続けた。自分たちのコミュニティ内の生活で英語を使用する必要性は限られていたし、実際に英語を話したのは指導者層や商人といった人々に限られていた。彼らはアメリカでの生活の中で必要な英語の語彙を取り入れながらも、家庭や酒場などの日常生活の中でドイツ語を使用し続けた[28]。また、ドイツ系の人々は意識的にドイツ語を維持しようとした。1730-40年代から改革派やルター派、モラヴィア派などの教会が中心となって学校を建設して、ドイツ語による教育を行っていた。その際、ドイツ本国からも教科書を輸入するなど、大西洋をまたいだドイツとのコネクションが維持されていた[29]。結果として、ドイツ系移民の子孫の多くは19世紀に入ってもドイツ語を維持していた[30]。

このような言語によるドイツ系コミュニティの一体性は、植民地時代を通じてペンシルヴァニアにおいて盛んに出版されたドイツ語の新聞やパンフレットなどの出版物によって一層強まった。当時、ジャーマンタウンのクリストファー・ザウアーやフィラデルフィアのアントン・アルムブリュスター、ハインリッヒ・ミュラーらドイツ系の印刷業者によって、何百点にも及ぶドイツ語の新聞などの定期刊行物や暦や宗教書といった書物が発行されていた。ドイツ語新聞はヨーロッパからの船の到着などのビジネスや移民に関する情報やヨーロッパの情勢、さらに植民地政治やそれに対する出版者の意見などを扱っていたが、このようなドイツ語新聞や出版物はドイツ系コミュニティの間で影響力を持った[31]。とりわけ、ザウアーは当時ペンシルヴァニアのドイツ系の中で最も大きな影響力を持っていた人物と言っても過言ではない。彼は1746年に創刊された新聞『ペンシルヴァニア・ベリヒテ』*Pensylvanische Berichte* を通じて、ペンシルヴァニアにおけるドイツ語の活字文化を活性化させた[32]。後に見るように、彼は印刷業者であると同時に政治家でもあったベンジャミン・フランクリンと政治的にも商売上も対立関係にあり、ザウアーの言論はドイツ系の政治的決定に大きな影響を及ぼすことになる[33]。

ドイツ系移民がアメリカで保持したのは言語だけではなかった。冠婚葬祭は出身地域のやり方で行われた。彼らが建てた家は南西ドイツの家屋の建築様式を模したものであ

History, (April 2004), 19.

[28] Roeber, "The Origin of Whatever Is Not English among Us," 258-259.

[29] *Ibid.*, 271-273.

[30] Jürgen Eichhoff, "The German Language in America," in *America and Germans*, 228.

[31] W. M. Verhoeven, " 'A Colony of *Aliens*': Germans and the German-Language Press in Colonial and Revolutionary Pennsylvania," in *Periodical Literature in Eighteenth Century America,* eds. Mark L. Kamrath and Sharon M. Harris (Knoxville: University of Tennessee Press, 2005), 75-78.

[32] 彼は1743年アメリカで最初に独語訳聖書を出版したことでも知られる。彼の一族が拠点としたジャーマンタウンは、アメリカにおけるドイツ系文化の中心地であった。Stephanie Wolf, *Urban Village: Population, Community, and Family Structure in Germantown, Pennsylvania, 1683-1800* (Princeton: Princeton University Press, 1976), 136-137.

[33] フランクリンはドイツ語出版物をアルムブリュスターに委託し、ザウアー一族とライバル関係にあった。Verhoeven, "A Colony of *Aliens*," 78.

ったし、当時のドイツ系の食事はほとんどが南西ドイツの料理で、ドイツ系が経営する酒場のメニューにはドイツ語で書かれた料理が並んでいた。また、イングランド系の人々が紅茶に熱中している間も、ドイツ系はウィンナ・コーヒーを飲んでいたと、あるイングランド系の観察者は記している[34]。

言語や慣習といった要素とは別の次元で、ドイツ系移民のアイデンティティを構成したものの一つが宗教であった。ペンシルヴァニアでは、それぞれのエスニック・グループと宗派の違いがほぼ対応していたため、宗派の違いはドイツ語と同様にドイツ系が他のエスニック・グループと自分たちを分けるアイデンティティの一つであった[35]。イングランド系住人の大部分がクエーカーもしくは国教徒、スコッチ・アイリッシュの大部分が長老派であったように、ドイツ系移民の大部分はルター派か改革派であり、それ以外の少数派集団もドイツで興ったプロテスタント諸宗派を信仰していた[36]。そして、教会はドイツ系コミュニティの中心であり、世俗的な会合なども教会を利用して行われた。教会の牧師はしばしばコミュニティの指導者となるエリートであり、その影響力は政治的決定にも及んだ[37]。18 世紀のドイツ系移民たちにとって、コミュニティと宗教は不可分なものであった。

このようにドイツ系移民は言語や慣習、宗教を共有することで強い一体性を作り出したが、アイデンティティには他者との関係の中で形成される側面がある[38]。ドイツ語を使用するという点で、ドイツ系移民は英語を使用するその他のエスニック・グループとは全く異質な集団であった。彼らはアメリカにおいて、イングランド系やスコッチ・アイリッシュ系などの英語を話す人々との対比の中で、「ジャーマン」や「ダッチ Dutch」、「パラタイン Palatine」、さらには「異邦人 Alien」などと呼び方こそ様々であったが、ひとまとめに呼ばれ、他の集団とは区別された[39]。また、当時の移民たちの日記などを見ると、ドイツ系自身も自分たちを「ドイツ人 Deutsch」と認識していたことがわかる[40]。例えば、1764 年、フィラデルフィアにおいて、指導的なドイツ系の人々が、新たに移住してくるドイツ系移民に援助を行うために、移民輸送の改善などを求めて政府に圧力をかける組織を設立したが、この組織の名称はペンシルヴァニア・ドイツ協会 German

---

[34] Roeber, "The Origin of Whatever Is Not English among Us," 259-262.
[35] Fogleman, *Hopeful Journeys*, 89.
[36] Lemon, *The Best Poor Man's Country*, 20-21.
[37] Tully, "Ethnicity, Religion, and Politics," 504.
[38] アメリカにおけるジャーマン・アイデンティティの形成については以下の文献を参照。Philip Otterness, *Becoming German: The 1709 Palatine Migration to New York* (Ithaca: Cornell University Press, 2004). この研究でオッターネスは1709年にニューヨークへ移住した本来出身地も宗派も異なるドイツ系移民たちが「ジャーマン」という集団アイデンティティを形成する過程を考察した。そこで彼は、それをイングランド系やスコッチ・アイリッシュといった他者との対比や相互作用の中で検討するだけではなく、ドイツ系内部の差異と相互作用にも目を向ける必要があるとして、より洗練された議論を行っているが、ドイツ系移民の外部との関係に関心を置く本稿では内部の差異までには踏み込まないということを断っておく。
[39] 'Dutch'は'Deutsch'がなまったものであり、'Palatine'はドイツ系移民の多かったプファルツに由来しているが、他の地域からのドイツ系移民たちもまとめて呼ばれた。Hermann Wellenreuther, "Image and Counterimage," 86-87.
[40] Henry Melchior Muhlenberg, translated and edited by Theodore G. Tappert and John W. Doberstein, *The Notebook of a Colonial Clergyman: Condensed from the Journals of Henry Melchior Muhlenberg* (Philadelphia, 1959).

Society of Pennsylvania、Deutschen Gesellschaft von Pennsylvanien であった[41]。

(2) 多言語社会の形成と緊張

ドイツ系移民を始めとする様々なエスニシティの流入の結果、18世紀の植民地社会は言語的に多様な社会になった。当時のペンシルヴァニアからメアリランドにかけての後背地を南下していけば、英語やドイツ語ばかりでなく、フランス語やオランダ語、スウェーデン語など様々な言語や方言を聞くことが出来たであろう[42]。しかし、人口の三分の一を占めたドイツ系の人々によって使用されたドイツ語は、ペンシルヴァニア植民地では他の言語とは異なる地位にあった。フランクリンは1753年、こう書き記している。

> [ペンシルヴァニアでは、]ドイツ語新聞や英独バイリンガル新聞が発行されています。一般の宣伝・告知はドイツ語と英語で印刷されており、通りの標識は両方の言語か場所によってはドイツ語のみで表示されています。ドイツ人はあらゆる契約やその他の法的文書を自分達の言語で作成し、(私はそうあるべきではないと思いますが) 裁判所でもそれが認められています。ドイツ人に関わる裁判が増加しているので、絶えず通訳が必要な状態です[43]。

当時のペンシルヴァニアにおいて、ドイツ語が使用されたのはドイツ系コミュニティの内部だけではなかった。植民地では英語が公用語として定められることはなく、公共の空間や制度の中においても英語とドイツ語が併用されていた。独立後に至っても、1776年および1789-90年の州憲法制定会議の議事録などを含む、州の公式文書は同様に英語とドイツ語が併記されていた[44]。18世紀のペンシルヴァニア植民地は、ドイツ系移民の大量の流入を通じて多言語社会となったと言うことができる。

しかし、こうした状況は植民地社会に緊張をもたらすことになった。フランクリンをはじめとするイングランド系のエリートたちは、植民地へのドイツ系移民の大量の流入とドイツ語による生活を維持するドイツ系コミュニティを恐怖とともに眺めていた。フランクリンの以下の発言は、当時のエリートたちが感じていたドイツ系移民の脅威を明瞭に示しているだろう。

> パラタインの農民が大挙して我が植民地に襲来し、自分たちだけで集住して自分たちの言葉と慣習を守り、我々の言葉と慣習を排除するのをどうして放っておけようか。イングランド人により建設されたペンシルヴァニアが、異邦人の植民地となり、彼らはやがて大勢になり我々が彼らをイギリス化 Anglifying するどころか、逆に我々をドイツ化 Germanize するに到り、我々の外観を身につけられぬと同様、我々の言葉や慣習を採用しないようなことになってもよいのだろうか[45]。

---

[41] Fogleman, *Hopeful Journeys*, 132-133.
[42] *Ibid.*, 3.
[43] Franklin to Peter Collinson, May 9, 1753, *The Papers of Benjamin Franklin*, 4: 484.
[44] Heinz Kloss, *The American Bilingual Tradition* (Rowley, Mass.: Newbury House, 1977), 143.
[45] "Observations concerning the Increace of Mankind," 1751, *The Papers of Benjamin Franklin*, 4: 234. (ベンジャミン・フランクリン、池田孝一訳、亀井俊介解説『ベンジャミン・フランクリン』研究社出版、1975年、152頁。) 翻訳を参照したが、訳を一部改めた。

ここ［ペンシルヴァニア植民地は］数年のうちにドイツ人の植民地になってしまうでしょう。彼らがわれわれの言語を学ぶどころか、われわれが彼らの言語を学んで、まるで外国にいるように暮らさなければならなくなります。既にイングランド人は習慣の不一致を嫌ってドイツ人 Dutch に囲まれたある地域から離れはじめています。そのうち、おそらく多くの人々が同じ理由でこの植民地から去っていくでしょう[46]。

とりわけ彼にとって脅威だったのは、ドイツ系移民たちがイギリスの「言葉や習慣を採用しない」こと、つまり植民地のホスト社会に同化しようとしないことであった。そして、ドイツ系移民の流入がピークに達した 1750 年ごろから、フランクリンやスコットランド移民であったウィリアム・スミスといった人々によって、言論や議会の場においてドイツ系移民の渡航制限やドイツ系住民の参政権の制限が盛んに説かれるようになる。スミスは英語の習得を通じて、ドイツ系移民に「自由」で優れたイギリスの制度を教えるべきであると主張し、さらには英語学校設立とともに英語以外の言語による出版の規制まで提案している。もちろん、こういった法的措置が実際に立法化されることはなかったが、これらはいずれも当時のドイツ系移民コミュニティが植民地でいかに大きなプレゼンスを持っていたかを示していると言えよう[47]。

実際にフランクリンやウィリアム・スミスらは、1755 年、ドイツ系向けの私立英語学校を設立した。この試みには、彼らの他にもジェームズ・ハミルトンやウィリアム・アレンなど当時の植民地の指導的立場にあった人々が多数関わっていた。しかし、ザウアーなどドイツ系の言論人はイングランド系による同化の試みに強く反対した。こうしたキャンペーンが功を奏し、この英語学校の事業は 1759 年には破綻してしまった[48]。英語学校をめぐる顛末は、同化に対するドイツ系の抵抗が非常に強かったことを示すエピソードであると言える。

ドイツ系移民に対する恐怖は多分に他者への偏見を含んだものであったが、当時の植民地が置かれていた状況をよく表してもいた。つまり、第二次英仏百年戦争と呼ばれる状態にあった 18 世紀において、フランスに対する脅威がドイツ系移民に対するイメージの中にも反映されていた。フランクリンはイングランドの政治家ピーター・コリンソンに宛てて、フロンティア地域において彼らがフランスに懐柔されることによって植民地防衛が危うくなるのではないかと、「よきイギリスの臣民」としての忠誠心の欠如に懸念を表している[49]。さらに、スミスは、ドイツ系の多くがプロテスタントなのにもかかわらず、「潜在的法王教信者 proto-papists」であるとさえ述べている[50]。つまり、当時の植民地エリートたちがドイツ系移民の同化を熱心に説いた背景には、単なるホスト社会への同化というよりも、フランスの脅威から植民地を防衛するために彼らにも「イギリス

---

[46] Franklin to James Parker, March 20, 1750, *Ibid.*, 4:120.
[47] Dennis Baron, *The English-Only Question: An Official Language for Americans?* (New Haven: Yale University Press, 1990), 66-69; Bill Piatt, *Only English?: Law and Language Policy in the United States*, (Albuquerque: University of New Mexico Press, 1990), 8.
[48] Baron, *The English-Only Question*, 69-71.
[49] Franklin to Peter Collinson, May 9, 1753, *Papers of Benjamin Franklin*, 4: 485.
[50] William Smith, *A Brief View of the Province of Pennsylvania* (London, 1755), 9; Allan Tully, *Forming American Politics: Ideals, Interests, and Institutions in Colonial New York and Pennsylvania* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1994), 111-112.

人意識」を植え付けなければならないという意識が働いていたことが伺えるのである[51]。

2. ドイツ系移民と植民地政治

前章で見たフランクリンらによるドイツ系移民に対する偏見は、彼らが植民地の中で多数を占めるようになることによって、植民地内におけるイングランド系のエリートたちのイニシアチブが奪われてしまうのではないかという不安と表裏一体のものであった。では、はたして実際にドイツ系移民やその子孫たちは従来の植民地の秩序を覆してしまったのかだろうか。本章では、植民地時代を通じてドイツ系移民がどういった形で植民地政治に関わっていたのかを明らかにした上で、とりわけ植民地王領化をめぐる 1764 年の選挙に注目して、植民地政治の変動の中で彼らが果たした役割を検討してみたい。

(1) 植民地政治の変動とドイツ系

1760 年代までのペンシルヴァニア植民地の政治を一言で言い表せば、植民地の領主であるペン一族と植民地議会の対立であった。領主植民地であったペンシルヴァニアでは、事実上の立法権は議会に属していたが、領主やその代理である総督は法案の提出権や拒否権を有していた[52]。また、ロンドンにいた領主は植民地の土地所有者から地代を徴収することによってのみ植民地経営の利益を得ていたために、入植者から地代を引き出すことに腐心した。それに対して、植民地生まれのイングランド系のクエーカーや国教徒のエリートは名望家として植民地政治のイニシアチブを維持するため入植者を保護し、領主と対立関係にあった。両者はクエーカー派と領主派と呼ばれる緩やかな党派を形成し、議会選挙などで競った[53]。

ドイツ系移民やその子孫はこのような対立の中で、自分たちの利益に適う側、つまりクエーカー派を支持した。ドイツ系移民にとって、クエーカー派は彼らを領主の課税から保護してくれる存在であり、同時に移民たちはドイツの封建的な領邦君主そのものであった領主トマス・ペンに強い反感を持っていた[54]。また、他の移民集団にとっても事情は同じであり、クエーカー派はエスニシティや宗派を超えて支持され、植民地議会の大多数を占めていた[55]。この状況は 1760 年代半ばまで続き、ドイツ系移民たちは他のエスニック・グループらと共にクエーカー派の名望家支配による安定した植民地政治を下支

---

[51] これはコリーの主張するフランスの脅威と「イギリス人意識」の関係が、植民地人にも共有されていたことをよく示している。リンダ・コリー、川北稔監訳『イギリス人の誕生』名古屋大学出版会、2000 年。とりわけ、フランクリンは熱心なイギリス帝国論者であった。Gordon S. Wood, *The Americanization of Benjamin Franklin* (New York: Penguin, 2004), 61-104.

[52] バーナード・ベイリン、田中和か子訳『アメリカ政治の起源』東京大学出版会、1975 年、159 頁。

[53] クエーカー派の大部分はクエーカー教徒であった。それに対し、領主派はペン一族を支持する総督や行政部などのわずかな勢力に過ぎなかった。Tully, *Forming American Politics*, 145-147.

[54] 実際、ザウアーは 1755 年 9 月の『ペンシルヴァニア・ベリヒテ』紙上で、領主は住人に地代という封建的貢租 Frohnen を課して自らの封臣 Lehens-Leute としようと試みている、と批判している。Fogleman, *Hopeful journeys*, 141.

[55] ドイツ系移民やスコッチ・アイリッシュ系がマジョリティであったランカスター郡の例はそれを顕著に表している。1750 年代までこのカウンティのイングランド系クエーカー教徒は 100 人にも満たないマイノリティであったが、1720 年代から 1750 年代までの間に選出された延べ議員数の 67 パーセントを彼らが占めた。Tully, *William Penn's Legacy*, 85-86.

えしていた。

そして、こうした植民地政治を縁取るように存在していたのが、植民地におけるイギリスのフランス、スペインとの戦争による植民地防衛と軍事費の拠出問題であった。18世紀のイギリス領植民地は、常にスペインやフランスによる侵略に警戒する必要があった。植民地防衛をめぐる問題は植民地戦争が激化していく中で、クエーカー派と領主派の対立を増幅させ、1740年代以降の植民地政治のあり方に変動をもたらすことになる。

1739年、スペインとの開戦に際して領主が植民地へ自衛軍創設を要請したが、宗教的平和主義を奉じて戦争関与を認めないクエーカー教徒の議会多数派がこれを拒否したことによって、領主とクエーカー派の対立が先鋭化した。翌1740年以降数年間の植民地議会選挙では植民地防衛を争点として両派が競ったが、結果は領主側の惨敗で、議会におけるクエーカー派の議席独占は覆らなかった。同時に、この選挙は両派によりドイツ系やスコッチ・アイリッシュ系の政治的動員が試みられた嚆矢でもあったが、ドイツ系の多くは他のエスニック・グループとともに、クエーカー派の支持を続けた。彼らは領主よりもクエーカー派に信頼を置いていたし、何より植民地軍の創設は負担の増大を意味した[56]。

しかし、1754年以降フレンチ・インディアン戦争の激化により植民地内での緊張が高まると、植民地社会の中心と周縁つまり議会内部とフロンティア地域の両方でこれまでの秩序が崩れ始め、1764年の植民地王領化をめぐる植民地全体を巻き込んだ騒動へと事態が加速していく。そして、ドイツ系移民たちの植民地政治への関わりはこの過程で大きく変化し、1764年の選挙は彼らの政治参加の転換点となった。

フロンティアは様々なエスニシティを持つヨーロッパ人やインディアンが交わる中間領域 middle ground であり、とりわけ植民地戦争の脅威が最も敏感に反映された空間であった[57]。ドイツ系やスコッチ・アイリッシュ系の入植者は絶えずインディアンと衝突を繰り返していたが、フレンチ・インディアン戦争終結後フランスの後ろ盾を失くして追い詰められたインディアン連合による1763年のポンティアックの反乱によってフロンティアの緊張は極限に達した。これに対し植民者たちは有効な解決策を打ち出さないクエーカー派議会に不信を募らせ、1756年頃からしばしば辺境のカウンティでは領主派の政治家が選出された[58]。さらに1764年、1,000人を超えるフロンティア住人が議会にインディアン対策とフロンティア地域の議会における過少代表[59]の是正を要求するためフ

---

[56] Idem, *Forming American Politics*, 147-149. 政治的にも強い影響力を持っていたザウアーは、新聞やパンフレットを利用してクエーカー派を支持するよう訴えた。彼はクエーカーの平和主義に共感しており、ウィリアム・ペンが保証した宗教的および政治的な自由は、クエーカー派のリーダーシップによって守られると信じていた。フィラデルフィア郡や近隣での彼の影響力は大きく、これまで投票を行ったことのなかったドイツ系住人400人がクエーカー派の候補者に投票した。Idem, "Ethnicity, Religion, and Politics," 499.

[57] middle ground の概念については、Susan Sleeper-Smith, "The Middle Ground Revisited: Introduction," *William and Mary Quarter* 63, no. 1 (2006), 3-8.

[58] ノーサンプトンのフロンティア地域で領主派の候補プラムステッドを支持したのはドイツ系入植者であったと言われている。Tully, "Ethnicity, Religion, and Politics," 505-506.

[59] 当時のペンシルヴァニア植民地では、ドイツ系やスコッチ・アイリッシュ系の多いカウンティは、イングランド系住人の多い東部のカウンティと比べ、議席の配分が少なく、ゲリマンダー選挙区となっていた。こうしたフロンティア地域の過少代表の問題は1776年の州憲法制定会議の選挙ま

ィラデルフィアに向けて行進を開始し、この通称「パクストン・ボーイズ」はクエーカー派の議員たちに衝撃を与えた[60]。

同時に議会でも植民地戦争の危機感が高まるにつれて、クエーカー派内部のイニシアチブは平和主義を貫く厳格なクエーカーから植民地防衛のために自衛軍設立を要求する戦争容認派のクエーカーや国教徒に移っていた。彼らは「武闘派クエーカーWar Quakers」と呼ばれ、リーダーとなったフランクリンの下で自衛軍設立の法案を制定し、フロンティアにおける要塞建設や自衛軍の常設化を進めた[61]。

しかし、こうした議会の変化に関わらずクエーカー派と領主は軍事費拠出のための領主への課税問題をめぐり対立を続けた。特権として領地への課税を拒否する領主に対し、1757 年以降議会はフランクリンをロンドンに派遣して直接交渉を行ったが解決は見なかった[62]。状況が膠着する中、1764 年 2 月 1 日、議会はポンティアックの反乱対策費として 50,000 ポンドを本国議会へ拠出することを決定したが、総督ジョン・ペンは再度領主への課税を拒否して議会のクエーカー派を憤慨させた[63]。

領主の課税拒否とフロンティア住民の反乱が重なり、両者に対する不信が頂点に達したクエーカー派は、長年議論されてきた植民地の王領化を実行して、領主の植民地政治への干渉を取り除こうとした。それはウィリアム・ペンの特許状を廃して、ペンシルヴァニアを王領植民地にしようとするものだった。王領化計画の最も熱心な推進者はフランクリンであった。彼は植民地政治の混乱の責任を領主の存在に帰し、1757 年イングランドに派遣された際に王領化の可能性を探った結果、植民地が王領化されてもウェストミンスターには植民地の特権を奪う権限はないと確信していた。1764 年 3 月 24 日、議会は植民地王領化のための請願書を国王に提出することを可決した[64]。この決議に反対した者は領主派のウィリアム・スミスら 4 人のみであった。これ以降、王領化の是非をめぐる実質的な住民投票と目された 10 月の議員選挙に向けて、両派は植民地全体を巻き込んだ政治的動員を展開していく[65]。

(2) 1764 年選挙とドイツ系の政治参加

この動きに対して植民地社会では様々な反応が起こった。イングランド系の多くはクエーカー派に従って王領化を支持したが、クエーカー派は特許状によって保証された自

で是正されず、植民地時代におけるエスニック・グループの政治的台頭を阻んだ。五十嵐武士『アメリカの建国　その栄光と試練』東京大学出版会、1984 年、211-212 頁。

[60] Hutson, *Pennsylvania Politics*, 85-106; Tully, *Forming American Politics*, 182-186.

[61] Bockelman and Ireland, "The Internal Revolution in Pennsylvania," 129-130; Tully, *Forming American Politics*, 150-159. フランクリンは既に 1740 年に植民地の自発的な民兵団を組織しており、1754 年フランスとインディアンの脅威に対抗するための植民地連合を目指したオルバニー会議にペンシルヴァニア代表として出席し、イギリスのブラドック将軍のフランス=インディアン連合軍討伐に協力するなど、植民地防衛に熱心であった。

[62] スペックは、領主とフランクリンの交渉がロンドンで行われたことを挙げて、18 世紀の植民地政治における権力の真の中心が大西洋を超えたロンドンにあったことを指摘している。W. A. Speck, "Britain and the Atlantic World," in *A Companion to Eighteenth-Century Britain*, ed. H. T. Dickinson (Malden, Mass.: Blackwell, 2002), 448-451.

[63] Hutson, *Pennsylvania Politics*, 113-120; Tully, *Forming American Politics*, 190-191.

[64] Hutson, *Pennsylvania Politics*, 51-54.

[65] *Ibid.*, 120-121; Tully, *Forming American Politics*, 191-194.

由と権利を守ろうとするジョン・ディキンソンら一部の議員の離脱によって分裂し、一般の人々の選択にも影響を与えた。また、長老派教会が指導するスコッチ・アイリッシュは、今回の計画をクエーカーによる政治支配の強化を目論むものとして領主派支持に転向した[66]。こうして、それまで微弱な勢力しか持たなかった領主派は、王領化反対を結集点として反クエーカー派のエリートやスコッチ・アイリッシュ系と合流する形で勢力を大幅に拡大した[67]。

そして、植民地王領化計画の発端は政治というアリーナにおける一部の植民地エリートの争いであったため、両派は世論の支持を得るために新聞やパンフレットなどのメディアを最大限に活用した。その意味でこの選挙はメディア選挙であったと言える[68]。これはドイツ系の場合にも当てはまり、それまで一貫してクエーカー派を支持してきた彼らの選択を左右した。ザウアーやミュラーなどの印刷業者はドイツ語のパンフレットや新聞を通じて、ドイツ系の政治への関心を呼び起こした。ミュラーは王領化運動の中でも反領主の立場を貫き続けたが、父クリストファー・ザウアーの跡を継いでドイツ系のオピニオン・リーダーとなっていたクリストファー・ザウアー・ジュニアは、植民地王領化を進めるクエーカー派はもはやウィリアム・ペンが保証した自由を脅かす存在でしかないとして、領主派支持に転じて王領化に強く反対した。彼はフランクリンやギャロウェイらを王領化により私腹を肥やす「狂人 Misgeburten」として非難した。彼の主張はドイツ語のメディアを通じて、宗派を超えてドイツ系の選択に影響を与えた[69]。

プロテスタント諸宗派の中にはモラヴィア派などのようにクエーカー教徒に対する信頼から支持を続けたものもあったが、ルター派か改革派に属する大多数のドイツ系はコミュニティの有権者による寄合やザウアーやミュラーの発行する新聞などから政情や彼らの主張を吟味して自らの立場を決定した。その際、寄合はコミュニティの教会などで行われ、彼らは個人による決定ではなく宗派ごとに支持を決定した[70]。

ドイツ系にとって王領化をめぐる騒動は文字通りクエーカー派と領主派による党派争いに過ぎなかったが、これまでのようにクエーカー派を支持し続けることは植民地の王領化を受け入れ本国政府の統治下に入るということであった。そして、それは彼らがこれまで享受した植民地の政治体制の放棄を意味し、イギリス国王による直接統治はペンシルヴァニアで手に入れた自由や財産を脅かす危険性があるものだった。植民地王領化反対の請願に最も熱心に署名したのはドイツ系であったと言われている[71]。また、フロンティアのドイツ系移民たちはインディアンの脅威に怯え、防衛政策を無視したクエーカー派が進める王領化計画に反対し、彼らの嘆状は他の地域の「同胞 Mitbürger」の同情

---

[66] 長老派とクエーカーの対立については、Tully, *Forming American Politics*, 185-189.
[67] Hutson, *Pennsylvania Politics*, 129-133, 148-159; Tully, *Forming American Politics*, 194-195.
[68] Hutson, *Pennsylvania Politics*, 124-127. フランクリンは『我々の公共の事柄に関する現状の冷静な考察』"Cool Thought on the Present Situation of Our Public Affairs"を発行して、王領地化を推進する自らの立場の正統性を主張している。Franklin, *Papers of Benjamin Franklin*, 11: 153-173.
[69] Roeber, *Palatines, Liberty, and Property*, 284-286. Tully, "Ethnicity, Religion, and Politics," 519-520; Hutson, *Pennsylvania Politics*, 174-175.
[70] Muhlenberg, *The Notebook of a Colonial Clergyman*, 110.
[71] Hutson, *Pennsylvania Politics*, 167-168.

を呼び、選択に際して少なからず影響を及ぼした[72]。こうしてルター派、改革派は共に選挙で領主派を支持することを決定した。選挙の翌年の2月15日、フィラデルフィアのルター派の指導者ミューレンベルグはクエーカー派の議員にその理由を問われて、以下のように語った。

> これまで私がこの植民地で見聞きしてきたことによれば、我々ドイツ系の住人は故クリストファー・ザウアー氏のようなドイツ系の新聞発行者が発行する新聞によって、毎年どのように投票するべきか、誰を選ぶべきかといった点について前もって教え込まれます。そして、常に熱心に勧められ教わる主な提案は以下のようなものです。ドイツ系住人はチャールズ2世がウィリアム・ペンと人々に下賜された古の特権、権利、自由をわずかでも放棄することのない議員を選ぶよう努めなさい[73]。

つまり、ペンシルヴァニア植民地への移住によって得た自由と権利を守るという動機によって、彼らは王領化に反対したのであった。その一方、領主派の側もドイツ系の支持を得るために、帰化のための手数料の肩代わりやフィラデルフィア郡での治安判事職をドイツ系の中から任命する約束、ルター派や改革派の教会の法人としての認可などの様々な便宜を図った。また、領主派の候補としてヘンリー・ケッペルら二名のドイツ系候補者を擁立した[74]。こうしてドイツ系は10月1日の選挙に臨んだ。

選挙の結果、領主派はドイツ系やスコッチ・アイリッシュが多数を占めたカウンティでいくつかの議席を獲得したものの、議会におけるクエーカー派の優位は覆らなかった。しかし、数字を見ればクエーカー派の勝利であったが、この選挙の真の勝者は領主派であった。つまり、フィラデルフィア郡から出馬した王領化推進のリーダーであったフランクリンとギャロウェイが両者とも僅差で落選したのであった。さらに、カウンティの議席8名のうち5名が領主派から選出され、王領化賛成派に大きな失望を与えた[75]。

そして、このフランクリンらの敗北にはドイツ系票が大きな役割を果たしていた。フィラデルフィアの商人チャールズ・ペティットがその時の様子を書き残している。「彼ら（ドイツ系）は（2日の）9時か10時ごろに投票を始め、7-800票が投じられた。そのうちの約500票が新候補（領主派）への票であった[76]」そして、フランクリンは19票差、ギャロウェイは7票差で敗れたのであった。フィラデルフィア郡におけるその年の投票者の総数は3,900人程度であったのでドイツ系が占めた割合は決して大きいものではなかったが、フィラデルフィア郡における領主派の勝利にドイツ系が貢献したと言うことが出来るだろう[77]。

フランクリン落選の背景にドイツ系の票の存在があったことは、フランクリン自身にも自覚されていた。というのも選挙運動の中で、領主派は1750年代の彼のドイツ系移民

---

[72] 1764年3月29日、一人のフロンティア地域のドイツ系住人がフィラデルフィアのミューレンベルグのもとにやってきて、シティのドイツ系が王領化を支持しないように説得してほしいと懇願した。Muhlenberg, *The Notebook of a Colonial Clergyman*, 104-105.
[73] *Ibid.*, 114-115.
[74] Hutson, *Pennsylvania Politics*, 173-174; Tully, "Ethnicity, Religion, and Politics," 520.
[75] Franklin, *Papers of Benjamin Franklin*, 11: 391-394; Tully, *Forming American Politics*, 197-198.
[76] Franklin, *Papers of Benjamin Franklin*, 11: 391.
[77] *Ibid.*, 11: 394.

に対する非難を利用して、ドイツ系の間に反フランクリン感情を高めたのだった。領主派の示唆により、ザウアー・ジュニアは先に見たフランクリンの論文「人類の増加に関する考察」の「パラタインの農民が…大挙して襲来し」"Palatine Boors ... herding together"の部分を「豚の群れ」"a Herd of Hogs"と誤読させるよう独語訳して『ペンシルヴァニア・ベリヒテ』に転載した。その反響の大きさは、ドイツ語で「(投票は) 新候補者へ！フランクリン氏が全ドイツ系住人の真の敵であるということは明白である」というブロードサイドが出るほどで[78]、選挙後、フランクリンは「彼らは1,000以上のドイツ人票を私から奪ったのです[79]」と、この記事が自分の敗北の原因であると言って嘆いた。

しかし、依然として議会で多数派を占めていたクエーカー派は王領化計画を進めることを決定し、フランクリンは国王に請願を提出する特使に任命され、再びロンドンに渡った。翌年の選挙は再び王領化問題が争点となったが、前回の反省からさらに大きな選挙キャンペーンを行ったクエーカー派が勢力を取り戻し、フランクリンは反王領化運動のリーダー、ディキンソンを破って議会に戻った[80]。しかし、フランクリンは王領化の望みを抱き続けたが、同じ年に制定された印紙法など本国による植民地への一連の課税に対応を迫られる中で王領化計画を断念することになる[81]。

1764年の選挙は王領化計画の挫折をもたらしただけではなく、その後の革命に至る植民地政治の展開の予兆をも示していた。つまり、既存の党派対立の枠内で争われながらも、各エスニック・グループは党派の枠を超えて自分たちの利害を直接主張し、植民地政治に関わるようになったのであった。1765年以降、本国との課税をめぐる問題が植民地政治の争点になるに従って、既存の党派はこれらの問題を対処できずに求心力を失っていった。この結果、自分たちの利害を反映させるために、エスニック・グループは自らの代表を議会に送り始めた[82]。そして、その傾向は1764年の選挙において既に現れているということが出来る。

ドイツ系はこの選挙において、はじめて自分たちの議員を選出したのだった。フィラデルフィア郡におけるヘンリー・ケッペルの選出はドイツ系全体の名誉として受け止められた。とりわけ、フランクリンとジョゼフ・ギャロウェイという植民地の指導者を破って当選したことは、ドイツ系にとって特別な意味を持った。彼の当選はルター派だけではなく、改革派、諸宗派の支持なしにはありえず、ペンシルヴァニア・ドイツ協会の理事長を務めた名士であった彼がドイツ系というアイデンティティを持つ人々によって支持されたことを示している。ルター派の政治意識を研究したレーバーは、ペンシルヴァニアのルター派ドイツ系の人々は1764年10月、初めて自律的な意識を持ってアメリカの植民地政治に参加したと主張しているが、これはここまで見てきたことからも伺える。おそらく、これは他の宗派にも当てはまるだろう[83]。

そして、これ以降ドイツ系は自分たちの代表を議会に選出する数を増やし、植民地議

---

[78] Schwartz, *A Mixed Multitude*, 231-232.
[79] To Richard Jackson, October 11, 1764, Franklin, *Papers of Benjamin Franklin*, 11: 397.
[80] Bockelman and Ireland, "The Internal Revolution in Pennsylvania," 141.
[81] Tully, *Forming American Politics*, 199-200.
[82] *Ibid.*, 208-209; Idem, "Ethnicity, Religion, and Politics," 529.
[83] Roeber, *Palatines, Liberty, and Property*, 291-292; Splitter, "The Germans in Pennsylvania Politics, 1758-1790," 50.

会の議席数36のうち、翌1765年は2人（7%）、1771年には4人（14%）、そして独立が宣言された1775年には、スコッチ・アイリッシュ系の9人（27%）には及ばなかったものの、6人（18%）に増加した[84]。スコッチ・アイリッシュ系はドイツ系よりも早くから政治化が進んでいたが、こうしたエスニック・グループの政治意識の覚醒と政治参加は、五十嵐武士が言うように1765年以降の反英闘争の中で高まったというよりは[85]、本稿で見てきたような植民地政治の帰結として見た方が適切であろう。つまり、植民地戦争の終わりをきっかけに80年間以上に渡ってイングランド系によって支配されていた植民地政治の構造が大きく変化し、エスニック・グループが植民地政治のアクターとして登場したのと併行して革命が起こったのであった。植民地政治の構造変化は革命の結果ではなく、革命の前提であったことになる。こうして、ドイツ系はペンシルヴァニア政治の重要な一員としてアメリカ革命に参加することになる。

おわりに

本稿では、大西洋史という視点から、ドイツ系移民をアメリカナイゼーションの対象ではなく、植民地社会を形成し、変化をもたらすアクターとして捉え直すことによって、18世紀におけるドイツ系移民の大量流入がペンシルヴァニア植民地に与えたインパクトを検討してきた。第一に、多文化および多言語社会の形成とそれに伴う社会的緊張の高まり、そして第二に、植民地政治における民族的多元性の生成、という点に注目することにより、ドイツ系移民の流入が植民地の社会や政治のあり方をそれ以前とは異なるものにしたことを明らかにすることができた。

こうしたドイツ系移民たちの経験は現在のアメリカ合衆国において年々増加するヒスパニックの問題を彷彿とさせる。自分たちの民族的伝統と言語を維持し、主流文化への同化を拒否する彼らは、WASPの伝統を重んじる人々や英語を公用語として主張する人々に強い危機感を与えているが、こうしたことは18世紀のペンシルヴァニア植民地においても経験されていた[86]。ドイツ系移民はただアメリカ社会に同化されたのではなかった。ドイツ語の実質的な公用語化や政治参加が端的に示すように、英語を話すイングランド系が支配的であった植民地社会のあり方に大きな変化を及ぼしたと言えよう。ドイツ系移民たちが経験した「アメリカナイゼーション」の過程は、同時に植民地社会が彼らによってドイツ化される「ジャーマナイゼーション」の過程でもあったのである。

---

[84] Bockelman and Ireland, "The Internal Revolution in Pennsylvania," 149-159.
[85] 五十嵐『アメリカの建国』、196-197頁。
[86] サミュエル・ハンチントン『分断されるアメリカ』集英社、2004年。

『クリオ』21号正誤表

	誤	正
p.1, l.2	SUPPLANTING SICIETIES: A DYNAMIC ...	SUPPLANTING SOCIETIES: A DYNAMIC ...
p.38, n.7	(Osnabruck, 2000)	(Osnabrück: Universitätsverlag Rasch, 2000)
p.43, n.40	(Philadelphia, 1959)	(Philadelphia: Muhlenberg Press, 1959)
p.45, n.46	*Ibid.*, 4:120.	*Ibid.*, 4: 120.
p.47, n.57	... *Mary Quarter* 63	... *Mary Quarterly* 63
p.51, n.79	To Richard Jackson, ...	Franklin to Richard Jackson, ...
pp.54-64	*op. cip....*	*op. cit.*,
p.58, n.35	1980年代に…	1780年代に…
p.74, n.28, l.1	…聖体会の規約（1642年）…	…聖体会（1642年設立）の規約…
p.74, n.28, l.2	…篤信派：聖体会…	…篤信派——聖体会…